

## 家族の元へ帰したい！

### 沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表 具志堅隆松さんの講演を聞いて

沖縄県男女共同参画センター「ていする」にて

2021年12月28日実施

会場に入る前に見かけた具志堅さんは、思っていたよりも小柄で穏やかな印象だった。40年もの長きにわたり遺骨収集を続けるその強い意志はどこから生まれるのだろうか。大事な言葉を聞き逃してはいけない、そんな緊張感を持って講演に臨んだ。



具志堅さんのグループ以外にも遺骨収集をする人たちはいる。その人たちとどこが違うのか。具志堅さんは見つかった遺骨を家族のもとに帰したいと願って活動をしている。見つかった遺骨を国に渡して終了とはしたくない。国には家族の元に帰してくれ、DNA鑑定をやってくれと言いつけてきた。多くの遺骨は身元不明として見つかる。

日本軍の兵隊は認識票を持っていたが、認識票を持った遺骨が見つかるケースはほとんどない。生き残った人に聞くと、認識票はあったけれど取り上げられたと言う。付けたまま殺されたら米軍にどういう部隊がそこにいたかバレてしまうからだ。ある時、認識票を13枚持った遺骨が発見された。日本軍の部隊構成で一番小さいものを分隊（13名～15名）と言う。おそらくその遺骨は分隊長のものと思われた。認識票に名前を刻印してあるのは少尉からで一般兵は番号だけだった。

厚労省には遺骨を家族の元に帰したいと言ったら名簿がないからわからないと言われた。当初そうか、と思ったが、日本中の息子や父親を召集令状1枚で呼び出し殺しておいて、名簿がないなんて絶対ありえんですよ！とこの時ばかりは声が大きくなった。今からでも追及しないとけないことだと思っている。

万年筆や石鹼箱など名前が書かれた遺品を持っている遺骨は5%に満たない。厚労省は、2003年DNA鑑定でシベリア強制労働者800体を帰していた。沖縄でもやって欲しいと要望したが、南方では遺骨の劣化が激しくDNAが十分抽出できないと言われた。それでも科学技術は年々進んでいる。今出来なくてもいつか出来る時がくるはずだと言いつけた。

2009年、那覇市の真嘉比で大規模な遺骨収集が行われた。都市開発の対象になった今では新都心といわれる地域だ。行政は戦没者のことを全く意識していなかった。ここは米軍にとって最大の激戦地で1945年5/12～5/18に約2,000人の米兵が死んでいる。日本軍の戦死者はもっと多い。そこが開発されるにあたって遺骨の収集がされないなんてありえない、と工事が休みの



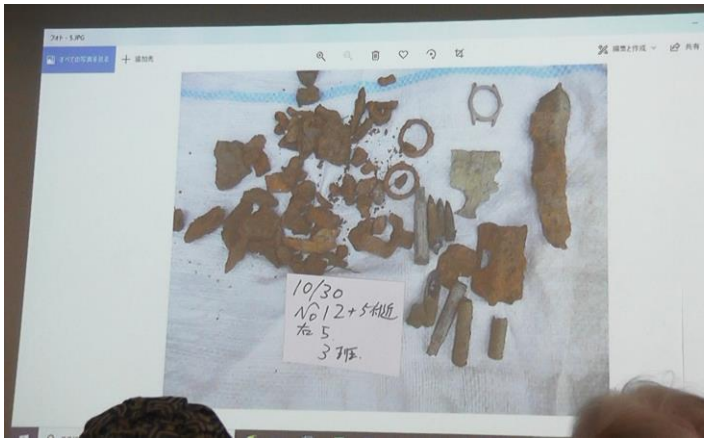
の日曜日に、誰が見ても分かるように遺骨の周りを掘って浮かび上がらせるようにしてメディアを呼んで訴えた。

厚労省が行うと入札した業者に依頼することになる。これには怒った。戦争が始まると企業が儲かる。戦争によって利益を出し、なおかつ戦後処理でも儲けるならば戦争に対する反省が全く見られない、お前たち公務員が出てきてやるべきだろう。しかしそれは現実的でなく、緊急雇用創出事業としてホームレスと失業者による事業となった。2009年10/9～12/10までの約2か月間に55人が働いた。7,000㎡(小さな運動場2つ分くらい)を掘り172体を見つけ、DNA鑑定で3人が家族の元へ帰れた。

そのうちの一人、朽方精(くちかたせい)さんは千葉県の方だ。万年筆に名前があった。共同通信で配信したところ遺族からTELがあった。遺族に最初に尋ねたのは、精さんは大柄な方だったか、小柄な方だったかということだった。精さんは当時としては大柄で180cmあったと聞いて、間違いないと思った。収集した骨はすべて記録を取っている。大腿骨は46cmあってそれまでに見つけた人の中で一番大きなものだった。朽方精さんは沖縄戦で亡くなった人の中で初めて自宅に帰れた人だ。

遺骨収集のために掘っていると毎日砲弾の破片や小銃弾などもいっぱい出てくる。沖縄戦で生き残った人の証言で「1発撃ったらすぐさま100発撃ち返されるんだよ。」というのは本当だ。ある時カウントしたことがある。真嘉比では日本軍5発、米軍511発で1:100まさに証言が裏付けられた。鉄の暴風というのは砲弾が台風の時の雨のように降り注ぐ、という例えだが、けっしてオーバーではない。2.5m×6mから230の砲弾の破片が出て来た。



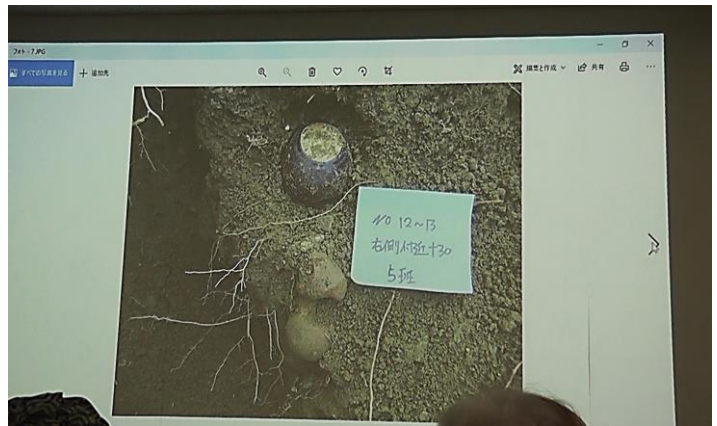


砲弾に巻かれているものを弾帯という。弾帯を見ると具志堅さんほどのような砲弾に巻かれていたものかが分かる。つまりどのような攻撃をされたかが分かるのだ。破裂して引き千切られている弾帯が、海から撃ち出されたもの（戦艦から長距離攻撃をされたもの）なのか、ロケット弾（距離は短いけれど、米兵の前方にいる日本兵を攻撃するもの）なのか。ロケット弾の弾帯があると、

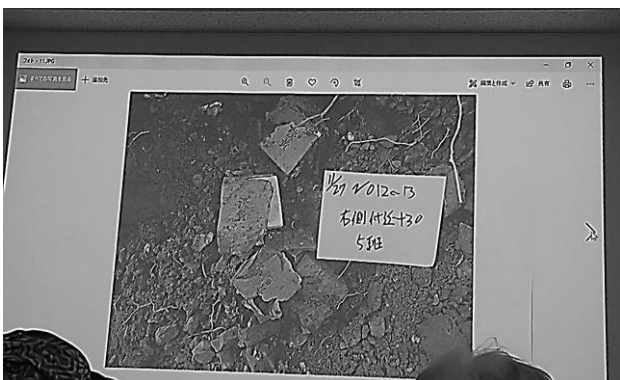
その場所で日本兵と米兵が向かい合ったことがわかるので、掘ると遺骨が出てくるといふ。

日本軍の焼き物で作った手りゅう弾は海軍が使っていた。陸戦隊というのは海で戦うことが出来なくなった海軍の部隊だ。金属が足らなくなって工場で焼き物に火薬を詰めていた。お寺の釣り鐘や家庭からの金属の供出の話聞いた時に、もう戦争を続けるのは無理だと思いませんでしたか、と具志堅さんは以前から疑問に思ったことを年配の人に聞いたことがある。

「そんなこと口に出したらえらい目にあうんだよ。」あるお寺のお坊さんが「出征する兵士に、命は大事にするんだよ、生きて帰るんだよ。」と言ったら、そのお坊さんは特高（特別高等警察）にしょっ引かれて拷問で死んでしまう。ものが言えなかったってこと。私たちが自由にものを言える権利は守らなくちゃいけない、ということを若い人たちにはこの写真を説明するときに必ず伝えている。



写真の骨は人間の大腿骨で、焼き物で作った手りゅう弾は おそらく兵士のズボンのポケットに入っていたと思われる。



ランドセルくらいの木箱に入っていた爆雷。これを背負って戦車の下に潜り込む。自爆攻撃用の爆雷。

蛸壺で見つかった遺骨。日本軍は蛸壺の大きさを決めている。直径70cm、深さ110cm、その中に小銃を持って潜んでいる。陣地壕の周辺にいくつも掘って待機させている。敵が近づくと鉄砲と頭だけを出して敵を撃つが、あんまり敵

が接近してきたら逃げる時には大変だ。全身を敵に晒すことになるから。

作業中に遺骨が見つかったら細かい作業をする人に交代する。遺骨を動かさないで、竹串や金串、刷毛を使って浮かび上がらせるように掘る。そうするとその方がどういう状態なのか、仰向けなのかうつ伏せなのか、何を持っているのか、ポケットに何が残っているのかが分かる。この方は一人で 30 発撃っている。撃った後には薬莢が残っている。腰のあたりに未使用の小銃弾が



おそらくは革製（革は残らない）のものに入っていた。座っているように見えるが、穴が小さくて倒れることが出来ない。それで蛸壺にうなだれるようになり鉄兜が前にずり落ちている状態だ。

ホームレスが遺骨収集をやっている、ということで一般の人からこういう質問を受けたことがある。「ホームレスの

人って働きますか？」要するに怠け者だからホームレスになったんじゃないか、ということです。とてもよく働きます。最初の頃は、何をしたいのかわからないから戸惑っているけれど、遺骨が出るようになると指示する必要が全くなかった。それどころか、お昼の時間になっても終わりの時間が来ても作業を止めない。55 人の半数近くが本土から来てホームレスをやっていた。その中にこんな人がいた。「自分は死ぬために（自殺するために）沖縄に来た。でも真嘉比の遺骨は死にたくて死んだんじゃない。自分は生きているのに死のうとしていた。遺骨は家族の元へ帰したい。私も家族の元に帰る」って言うんです。家族を捨てて来たけれど、生きていたらそれが出来るって。遺骨収集はある意味「命の教育」ですよ。これは予想外に嬉しいことだった。



お腹に 5 銭硬貨のある遺骨、5 銭硬貨を千人針に縫い付けていたことをご存知ですか？死線（4 銭）を超えるという意味。沖縄で千人針をお腹に巻いていたのは暑かっただろうと思う。

茶碗の中に指を突っ込んだ遺骨。ガマフヤーの仲間が、茶碗に自分の水筒の水を注いでいた。気持ちが分かります。



2021 年 10 月、沖縄で見つかった遺骨だけでなく、アジア太平洋地域で見つかった遺骨も DNA 鑑定の対象となった。日本という国が戦後 76 年目にしてやっと太平洋戦争の国内の犠牲者を遺族の元に帰すことになった。そのこと自体は喜ばしいが、多くの国民に知らされていない。もっと広報して欲しいと要望している。

そのさなかに防衛省が戦没者の遺骨がある南部の土砂を辺野古新基地建設に使おうとしている。地元の業者はああいう場所（戦没者がいる場所）は絶対にやらない。当初は新規参入している業者に止めてもらおうと思ったが、問題の本質はそこではないと気づいた。悪しき需要を作り出している国が間違っている。人の道に反することです。

旧日本軍というのは、防衛省の前身であり、遺骨は先輩であり戦友だ。戦友を殺したアメリカの基地を作るためにその遺骨を使うのは戦友、遺族に対する裏切りだ。これをみんなの声に作り上げていこうと思っている。全国の自治体に南部(糸満市、八重瀬町)からの土砂採取に反対する意見書の可決を呼び掛けている。

遺骨収集をやり続ける原動力を一言でいうと「不条理のそばを黙って通り過ぎない」ということ。6.23の平和学習の講師に呼ばれる時「いじめのそばを黙って通り過ぎないでね。最初はじっと見ているだけでもいいけど、止まないようだったら、いじめている人間にあんた間違ってるよ、と言ってね。」「いじめられたら嫌だって言ってね。」と子どもたちに伝えている。

沖縄はずっと国からいじめられている。それに対して沖縄の人間はずっと嫌だと声をあげている。その最前線が辺野古のゲート前だ。今回の戦没者の遺骨を辺野古新基地建設の埋め立てに使うということは、国によるいじめが沖縄からさらに弱い、声をあげられない遺骨に向かったのだと思っている。遺骨収集は本来国がやるべきことだ。遺骨収集をするのは、やるべきことをやってこなかった国に対する怒りだ。

基地のある所に戦争はやってくると、軍隊は住民を守らないこと、は私が沖縄戦から学んだことだ。具志堅さんは遺骨混じりの土砂を基地建設に使うな、と訴えている。私はどんな土砂でも人を殺しに行く基地建設に使うことは許されないとと思っている。

会場から「(遺骨収集の)費用はどうしているのか？」と質問があった。それに対して「バイクで現場へ行くガソリン代くらいで費用はそうかかりません。お金は嫌いです。」とお応えになった。間違いなく権力者が一番苦手とする人だ。

2022年6月8日 嶋田由加里